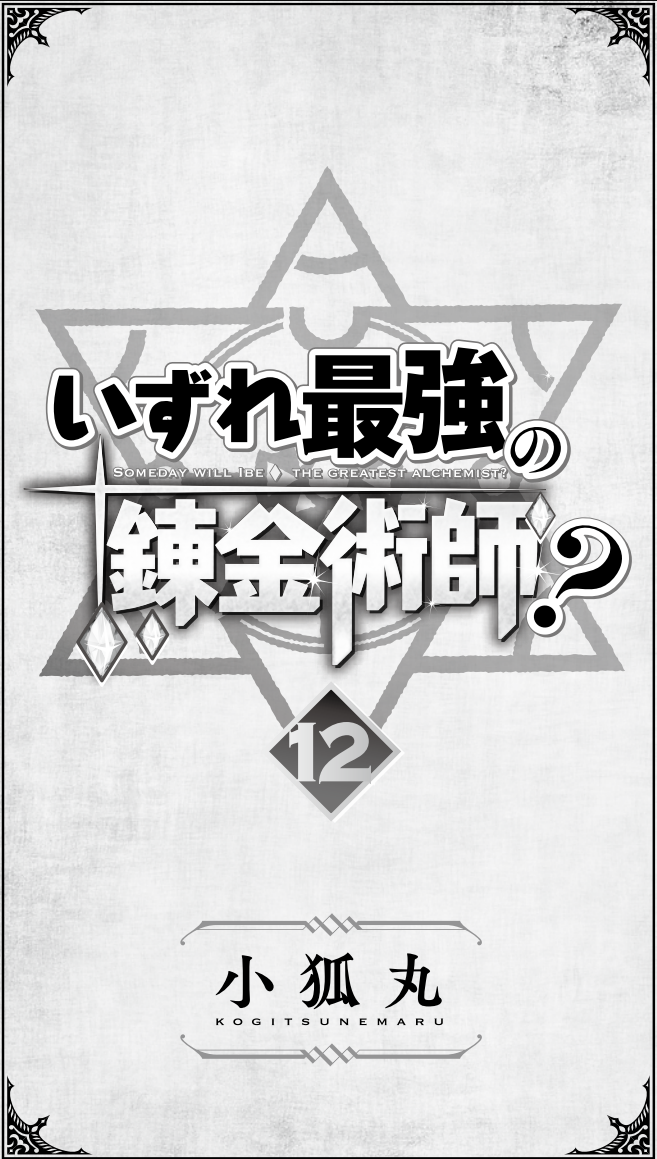




# いずれ最強の 錬金術師?

SOMEDAY WILL I BE THE GREATEST ALCHEMIST?

12

小狐丸

KOGITSUNEMARU

# 登場人物紹介

CHARACTERS

## フルーナ

優しく穏やかな  
人魚族のお姉さん。

## ベールクト

有翼人族の女の子。  
凛々しく勝気っぽい。

## マリア

家事もバトルも  
こなす美少女  
メイド。  
タクミの奥さん  
その2。

## タクミ

ちょっとぶり臆病な本作の主人公。  
剣と魔法の異世界に転生したが、  
喧嘩もしたことがないので  
生産職を究めようと決意する。

## マーニ

兎人族のセクシー美女。  
タクミの奥さんその3。

## ソフィア

タクミの  
護衛を務める  
エルフの剣士。  
タクミの奥さん  
その1。

## 春香

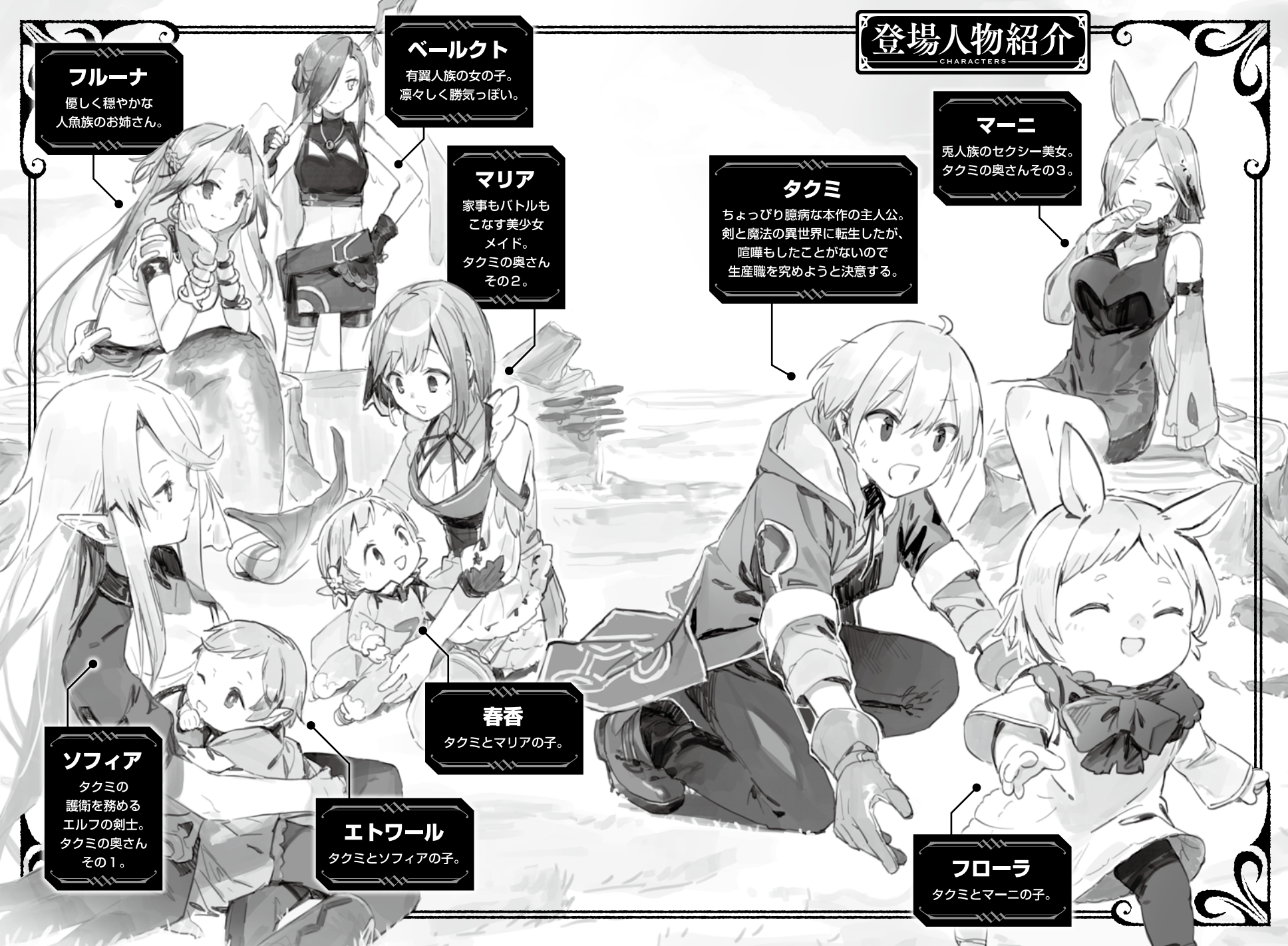
タクミとマリアの子。

## エトワール

タクミとソフィアの子。

## フローラ

タクミとマーニの子。



## 1 僕らも色々試してみよう

僕、タクミに三人の子供が出来てしばらく経った頃――

聖域の屋敷の訓練所で、マーニが三日月形の巨大な刃物を振り回していた。隣にいた日本を故郷に持つ同輩のアカネが言う。

「ねえ、あれって、もう大斧でもよかつたんじゃないの？」

「……うん、僕もそう思うよ」

当初、長物ながものを嫌がった僕の三人の奥さんの一人、兎人族うさぎじんぞくのマーニの要望に応じて武器を造ったけど、意外とマーニは一撃必殺の武器を気に入った。

そうなると、刃のバケモノみたいな物でも、持ち手が真ん中にあるために、さほど間合いの長くないアレより、普通に長柄ながえの大斧でよかつたと思う。

マーニが斧術ふじゅつスキルを磨みがけばいい話だもの。

ただ、無駄むだだったわけじゃない。

体術と併用して戦いやすいという、アレにはアレの良い所がある。

「マーニが斧術スキルを習得した今だから、大型のクレセントアックスでも大丈夫でしょうが、慣

れるまではアレでよかったと思いますよ」

もう一人の奥さん、エルフのソフィアが、マーニの訓練の様子を見ながらフォローしてくれた。

「だね。この際、皆さんも色々な武器を試してみる？」

「はい！ はい！ 私やります！ 私も槍以外の武器を試してみたいです！」

どうせ僕も変わったものからオーソドックスなものまで試してみようと考えていたので、ソフィア達にも勧めると、三人目の奥さんで人族のメイドのマリアが驚くほど積極的だ。

どうやら剣と槍を使い分けるソフィアや僕を見ていて、自分も槍以外の武器を使ってみたかったらしい。

「色々な武術スキルや職業レベルが上がれば、強力な上位職を取得出来るかもしれないし、この際、皆さんで色々試してみよう」

「そうね。私も近接戦闘に慣れた方がいいわね」

後衛でいる事がほとんどのアカネも、近接戦闘の重要性は分かっていると思う。アカネ自身が護身の術を持つ事で、パーティー全体の安定感がグッと増すというのも理解しているだろう。

それに僕はもう一振り剣を打とうと思っていた。

僕には、ソフィアが持つ聖剣アマテラスと対を成す絶剣ツクヨミがあるが、これは普通の魔物や人間には有効なんだけど、この前のダンジョンにあったアンデッド部屋——アンデッド系の魔物ばかりが出現する部屋——だと使えない剣になってしまう。

最近の僕は、体術と錬金術で間合いの近い戦闘をこなしていたけど、アンデッドや瘴気を多く取り込んだ魔物に特効のある光属性の剣が欲しくなったんだ。

それに色々な武器に手を出すのは、僕達以外なら器用貧乏になりそうだけど、僕達には女神ノル様の恩恵があるので、各種スキルや職業レベルを育てるハードルはグッと低くなる。

皆さんもその辺りを実感しているから、この機会に色々な武器を使ってみようという事になったんだと思う。

リビングに集まって、それぞれ試してみたい武器の希望を聞く。

「私は棍術スキルと鎚術スキルを取得してみようかと思っています。打撃武器を重点的に訓練してみようかと」

「うん、いいんじゃないかな。じゃあソフィアには、棍と戦鎚を造ってみるよ」

「ありがとうございます」

ソフィアは打撃武器にチャレンジするようだ。スケルトンやゴーレムには、打撃武器の方が有効だからね。

「私は剣をソフィアさんに習います。剣士系の職業にも就いてみたいので」

「そうだね。マリアは槍一筋だったもんね。いいんじゃないかな」

マリアは剣の訓練をと言う。片手剣がいいのかな。それとも大剣かな。とりあえず色々造つ

てみるか。

「私は槍がいいのかな。どう思う、タクミ」

「アカネは今まで後衛専門だったからね。槍のように間合いが遠い方が最初は安心するんじゃないかな」

「そうよね。じゃあ私には槍か、薙刀なぎなたみたいなのをお願いね」

「了解。長物をいくつか用意するよ」

後衛で魔法による攻撃や回復、それと皆んなのサポートをしていたアカネは、槍の訓練をするよ  
うだ。

「ルルは大っきなのが良いニャー！」

「大っきなの？」

「そうニャー！」

アカネの従者で猫人族ねじんぞくの女の子のルルちゃんは大っきな武器を所望しょもうのようだ。

「大っきなのねえ……そうだな、ルルちゃんなら武器の重さに負ける事はないか」

「ルルは力持ちニャー！」

「そうだね。分かった、大っきな武器を考えてみるよ」

「やったニャー！」

身体能力の高い獣人族じゅうじんぞくのルルちゃんは、高レベルな事もあり、その小柄こがらな見た目にそぐわぬ力持

ちだ。それこそ巨大な鉄の塊かたまりでも楽に振り回すだろう。

「レーヴァは自分の武器は自分で造るであります」

「それはそうだよね」

「そうであります。自分で色々いろいろと試行錯誤しこうさくごするのが楽しいのであります」

狐人族きつぽんぞくのレーヴァも違う武器を試してみるらしいが、僕と同じ生産職なので、自分で造るようだ。  
生産は、アイデアを出して造って直してを繰り返すのが楽しいんだから当然だよね。

皆んなの要望をメモに取ったら、僕は鉱石こうせきと素材の確保かな。在庫はあったかな。

僕はアイテムボックスの中にある大量の素材を、リストアップする事から始めた。

## 2 宰相夫人再来さいししょう

僕とレーヴァが皆んなの要望に沿った武器を製作し始め少し経ったある日――

「えっ？ ロザリー夫人が？ どうして？ サイモン様はいないんですよ？」

「ちよっと落ち着いてタクミ」

工房で武器の構想を練ねっていた時、風の大精霊シルフが予想外の人物の訪問を報しらせてくれた。

「ふう……それで、ロザリー夫人が来てるの？」



「もう宿泊施設にチェックインしているわよ」

「どうしたんだろう。この前帰ったばかりなのに……」

サイモン様には僕達が暮らす聖域の運営も任せられる文官の選定をお願いしているのだが、彼から、文官の件はもう少し時間が欲しいと連絡をもらっている。

まあ、サイモン様の仕事の話にロザリー夫人は関与しないと思うから、別件だと思うんだけど……考えても分からないな。

「とりあえず会いに行くか」

「それが良いと思うわ。ここで考えていても始まらないもの」

「うん、そうするよ。レーヴァ、僕はロザリー夫人に会ってくるから、ソフィア達にそう伝えてくれるかな」

「了解でありますよ」

机に向かってアイデアを絞<sup>しぼ</sup>り出しているレーヴァに一声かけ、僕は宿泊施設のある出島<sup>でしま</sup>区画へ転移した。

宿泊施設のフロントで用件を伝えてロビーでしばらく待っていると、宿泊施設で働く従業員がやってきた。

「タクミ様、ポートフォート夫人がお部屋へお連れするようにとの事です。ご案内致しますので、

どうぞこちらへ」

「分かりました。お願いします」

だいぶサービス業も浸透してきたなあ。聖域の住民の中で、宿泊施設での仕事は人気だっているしね。

部屋に通されると、ロザリー夫人はスイートルームのリビングにあるソファに座っていた。

僕を見ると立ち上がり、ニコニコと微笑<sup>ほほえ</sup>んで迎えてくれたんだけど、その微笑みに少し警戒したのは、多分<sup>たぶん</sup>間違いないと思う。

「タクミさん、お久しぶりね」

「いえ、久しぶりというか、この前帰ったばかりだと思うのですが……」

「あら、男の子は細かい事を言っちゃダメよ」

何故<sup>なぜ</sup>だかロザリー夫人の機嫌がいい。それが余計に僕を警戒させる。

「それで今回の訪問の目的は？ サイモン様と一緒にみたいですし、休暇<sup>きゅうか</sup>ですか？」

「フツ、タクミさんはウチのに文官……いえ、内政官と言った方がいいかしら、そういう人材の採用を頼んでいるのよね」

「はい。いくつもの国と取引が増えて、流石<sup>さすが</sup>に今までのような体制では厳しくなってきましたので……」

「それは当然よね。もう聖域はタクミさんを中心にした小さな国ですもの」

聖域に人手が足りないのは、サイモン様を通してロザリー夫人も知っているだろうけど、それがどうしたんだろう。ただの休暇じゃなさそうだな。

「……それで、ロザリー夫人の訪問理由は？」

「勿論、聖域の文官になるためよ」

「えっ!？」

絶句とはまさにこの状態の事だろう。

バーキラ王国の宰相夫人が文官に応募してきたの？ うそ？ 嘘<sup>うそ</sup>って言うてください。

「それでもサイモンと一緒にいる前は内政官としてバリバリ働いていたのよ。少ーし、歳は取っているけど、長年貴族のパーティーやご婦人方のサロンに行った経験もあるから、貴族の扱いは得意な方よ」

「イヤイヤイヤ、バーキラ王国の宰相夫人が聖域で文官ですか？ ありえないでしょう」

「あら、あのひと私は別だと考えてちようだい。あの人も今文官を探しているのでしょうけど、それとは別口だと思ってくれていいわ。一緒に連れてきた侍女<sup>じよ</sup>達も文官の仕事を任せてもいいくらい優秀よ」

今回、ロザリー夫人は、老人の馭者<sup>ぎよしゃ</sup>一人とその妻、身の回りの世話をする侍女を二人連れてきていた。馭者の人もその奥さんも、老人とは言っても背筋がピンと伸び、見た目は若々しい。この二

人は子爵家の使用人として教育を受けたとかで、文官としての仕事も出来るらしい。

ロザリー夫人と合わせて文官が五人増えるのは、喉<sup>のど</sup>から手が出るほど人手が欲しい現状、とてもありがたいんだけど……本当にいいのかな。

「それと提案<sup>ていせん</sup>なんだけど、聖域の政務<sup>せいむ</sup>を司る建物が必要じゃないかしら。いつまでもタクミさんのお屋敷ではダメだと思うの」

「……ロザリー夫人が文官を云々<sup>うんぬん</sup>は、サイモン様に連絡して確認してからでもいいですか？ 政務専用の建物も考えてみます」

「あら、あの人に確認なんて必要ないのに。まあ、タクミさんがそうしたいのなら、それでいいわ。しばらくはここからタクミさんの屋敷に通ってお手伝いするわね」

「はあ、当面は簡単なお手伝い程度になると思いますが……」

「勿論、立場がちゃんとするまで、重要な書類<sup>しるひ</sup>なんて触<sup>ふ</sup>らないわよ」

本当にどういうつもりだろう。ただ単に聖域が気に入って、ここで暮らすのに仕事が必要だと思ってる売り込んでくるのかな。

政務専用の建物は、役所みたいなものだよね。前からあれば良いとは思っていたからちようどいいか。

さて、直ぐにサイモン様に連絡しないといけないな。

王都にある僕のお店に通信の魔導具で連絡し、サイモン様にロザリー夫人の件を確認してもらう事にした。その間、家族や屋敷で書類仕事を任せている文官シャルロット達と相談すると、政務を行う建物が必要だという事になった。

「仕事とプライベートの区別は必要ですね」

「この際、聖域の住民の戸籍を作るべきじゃないの」

シャルロットとアカネも役所的なものが必要だと思っていたらしい。

「戸籍か、正確な人口を把握するのは必要だな」

「そうですね。バーキラ王国やユグル王国でも、街には役所がありますし、村では村長がその役割を果たしています」

「そ、そうだったんだね。対応が遅すぎたのか……」

ソフィアが言ったように、そういえば街には役所があったよ。

「聖域は、住民から税を徴収するようになったのは最近ですから。それに聖域の住民なら税をごまかしたりする心配ありませんでしたし」

「でも聖域もこれだけ人口が増えてきたのなら役所が必要よ。税を徴収しているんだから、それを

住民に還元する必要があるわ」

ソフィアが言うように、最初は田畑や住居は僕が造ったものを与え、自給自足が出来るまでは、そのサポートもしていた。

色んな種族の色んな人達が暮らすようになって仕事の幅も広がり、僕が全部与える歪な関係じゃなくなつた。

そして税を徴収するようになったんだけど、住民に還元するのは当然だったね。

基本的に公共事業的なものは、ほとんど僕かレーヴァが魔法でこなしていたから思い付かなかった。

「そうだね。とりあえず、建物だけでも建てておくよ」

「サイモン様が紹介してくれる予定の方達が来ると、この屋敷では手狭ですからね」  
シャルロットがそう言った。

とりあえずロザリー夫人の事は、サイモン様の連絡待ちなので、サイモン様が紹介してくれる予定の文官達の仕事を造ってしまおう。ついでにその側に三階建てのマンションみたいなものを建てておくかな。

寮のような建物はもう三度目だから慣れたものだ。一つは僕の屋敷の側に建てたメリーベル達メイドとシャルロット達文官娘用の住居。二つ目は、ユグル王国の王女ミール様に頼まれて建てた使用人や侍女用のもの。そして今回の三度目だから、材料さえあれば目をつぶってても造れる。



僕とレーヴァは、新しい装備の製作を一旦止めて、先に政務を執るための建物と、そこで働く人間の宿舎を造る事にした。

レーヴァと一緒に、中央区画の端っこの方、空き地の広がっていた場所を整地する。土属性魔法で平らにした土地は、かなりのスペースだ。

「地下三階で地上五階でありますね」

「うん、地下三階分の土や石を錬成して地上部分の建物用の素材にしよう」

「建物用の素材というと、補強材と窓ガラスの素材、あとは板張りにする部屋用の木材くらいでありますか」

「そうだね。魔導具関連は後回しにすればいいから、外側だけでも造ってしまおうか」

「了解であります」

木材や石材、珪砂、鉄、銅などを、建設予定地に積み上げていく。

建物の間取りや仕様を描き込んだ図を見ながら、強くイメージしていく。

僕が大きい方の役所の建物を担当、レーヴァが寮というか宿舎の錬成を担当する。

「錬成!!」

地響きと共に魔力光が輝き石造りの建物が完成する。

地下三階、地上五階の石造りの建物の外観は、昔の銀行をイメージしてもらえば分かりやすいか

もしれない。

「ふう、細かな彫刻はドワーフやエルフの職人に頼もうかな」

「それがいいであります」

中と外のチェックと微調整は必要だけど、建物を飾る彫刻なんかは、ドワーフやエルフの職人達に任せた方がいい。彼等の仕事を奪う事になるからね。

「じゃあ、チェックしちやおうか」

「了解であります」

レーヴァと手分けして、外周りと中のチェックをしていく。

大きな建物なので構造的に大丈夫か、追加で補強しないといけない箇所はないか調べておいた。

一通りチェックし終え、魔導具の設置は明日にしようとしてレーヴァと屋敷へ戻り、リビングのソファアに座ると、お茶を持ってきてくれたメリーベルからユグル王国の王妃ルーミア様が戻ってきていると報された。

「えっと、この前帰ったばかりだよね」

「そうですね」

まるでデジャブのようだな。

「それでルーミア様から、旦那様へ言付けがございます。明日、何時でも構わないのでお会いした

いそうです」

「……分かったよ」

ルーミア様はうちに来て、僕とソフィアの子エトワールをひとしきり可愛がると、そう言付けてお隣にあるミーミル様の屋敷へ帰ったらしい。

ロザリー夫人に続いて、ルーミア様まで聖域に戻ってきた。

ユグル王やサイモン様の許可は得たんだろうか？ ユグル王もサイモン様も奥さんに弱いからな。

まあ、僕も人の事は言えないけどね。

### 3 王妃様は帰らないらしい

装備を色々と造りたいんだけど、なかなか集中して作業させてくれない。

マーニは、頻繁に訓練所で鍛錬し、着実に斧術スキルを伸ばしている。

今日はレーヴァは、役所と寮に照明と水まわり、トイレに浄化の魔導具を設置した後、自分用の武具を考えるらしい。

ソフィアとマリアは子供達の世話をしている。

アカネとルルちゃんは王都にある僕達の店に用事があるらしく、屋敷の地下にあるゲートで王都

に転移していった。

そして僕は、ルーミア様に呼ばれていたのので、お隣に行こうと思っていたんだけど、朝からルーミア様が我が家にやってきた。

「ウフフツ、本当に可愛いわね」

ルーミア様はソファアに座り、エトワールを抱いてご満悦だ。

「国へ戻ったばかりで、またここに来て良かったんですか？」

「フツツ、その前に、せっかく淹れてもらったお茶が冷めないうちに飲みましょう」

「はあ」

エトワールをメリーベルに預けると、優雅な仕草でお茶を飲むルーミア様。こういう仕草ひとつ見ても、流石は王妃だと感心してしまう。ミーミル様も同じように、気品のある所作が染み付いているから、王族って凄いなと思う。

「タクミ君、私ここで暮らす事にしたわ」

「へっ？」

お茶を飲み終えたルーミア様が唐突に発した言葉に驚く。

「ど、どういう事ですか？」

「あら、そのままでの意味よ。私は長く王城で窮屈な暮らしをしてきたもの。そろそろノンビリ自由に暮らしても良いと思わない？ それに、ここならエトワールちゃんの成長を見ていられるもの」

ルーミア様の聖域移住宣言に、僕が呆然としてみると、メリーベルに案内されたミーミル様がやってきた。

「あ、ミーミル様」

「お邪魔します、タクミ様。お母様が我儘<sup>わがまま</sup>を言い出したのですが、私には止める事が出来なくて……」

「あら、我儘なんて心外だわ。娘の側で暮らしたいというのは母親として真つ当な望みだと思うわよ」

「でしたら、私が国に戻ったらお母様もお戻りになるのですね？」

「ええ、ミーミルが戻るのですたらね」

「クッ、お母様はズルいです。今さら、私が窮屈な国に帰りたくないのを分かつて言ってますね」

「当たり前です。貴女<sup>あなた</sup>は私の娘ですよ。貴女の事なんて、手に取るように分かります」

「まあまあ、ルーミア様もミーミル様も落ち着いてください」

言い争いを始めたルーミア様とミーミル様を宥め<sup>なだ</sup>め、僕は尋ねる。

「それで本当にお隣に住むのですか？」

「ええ、タクミ君のお屋敷のお隣なら、いつでもエリザベス様とお茶出来ますし、何よりエトワールちゃんにいつでも会えるわ」

エリザベス様とは文官シャルロットのお母さんで、女性ながらボルド男爵家の当主だ。

ルーミア様がエトワールの事を気に入ってくれているのはありがたいんだけど、それが理由で聖域に住むんじゃないだろうな。

「お父様は何と仰<sup>おっしゃ</sup>っているのですか？」

「あら、私が何処に住むかについて、あの人の許可は必要ないわ」

僕はルーミア様の言葉を聞き、首を横に振る。

「イヤイヤイヤ、ありますから。ルーミア様は王妃様ですから。ユグル王の許可が必要ないなんてありえませんか」

「あら、人間の国ではそうなのね。生憎<sup>あいにく</sup>、ユグル王国はエルフの国。人間の国とはルールが違うのよ」

「平気な顔して嘘をつかないでください。お母様！」

ミーミル様がそう言った。

ルーミア様が、あまりに普通のトーンで言うから、信じかけちゃったじゃないか。

「それに、これはタクミ君にもメリットはあるのよ」

「メリットですか？」

「ええ、私は王妃を引退したけれど、ここで遊んで暮らすのはアレじゃない。だからタクミ君のお仕事を手伝ってあげようと思ったのよ。連れてきた侍女は仕事が出来る子ばかりよ」



「いや、ユグル王国の王妃に聖域の仕事をさせるのは流石にまずいでしょう」

「だから王妃は引退って言ってるじゃない。ここにいるのはただのルーミアよ」

ルーミア様が涼しい顔で無茶を言うので、僕とミーミル様は頭を抱えてどうしようと思っていた。  
この王妃様、普段は穏やかで優しい女性なんだけど、こういうちょっと……いや、だいぶぶっ飛んだ所があるんだよね。

「タクミ様、お父様と直ぐに連絡を取りますから、この件は少し待っていただけますか？」

「はい、勿論です」

僕が頷くと、ルーミア様が言う。

「あら、あの人には連絡しても同じですのに」

「お母様は少し黙っててください！」

「タクミ君、ミーミルがイジメるのお」

「もう！ お母様！」

「……」

空気になろう。

いたたまれない。

僕的には、ロザリー夫人もルーミア様も、背景がなければ是非助けてもらいたいけどな。

お二人共頭の回転が速いし、貴族や商人ともやりあえる人だからね。

ああ、工房にこもりたい。



バーキラ王国の王城のあてがわれた執務室で、頭を抱える男がいた。バーキラ王国宰相のサイモンだ。

妻のロザリーが置き手紙を残して聖域へと旅立ってしまった。

置き手紙には、バーキラ王国から離れ、聖域の民として政務の手助けをするところ。

確かにロザリーは、結婚前は女だてらにバリバリと仕事をこなす才媛だった。

これは貴族の子女としては珍しい。何故なら貴族家に女として生まれたならば、政略結婚の駒となるのが普通で、そこに仕事が出来ることなど求められない。

そんな中、幸いにもロザリーとサイモンは仕事場で知り合い、恋愛関係となり結婚した。これはとても珍しいケースだと言える。

そのロザリーが聖域へ移住するという。

現在、サイモンも聖域の運営を任せられる文官を探している。

これが当初想定していた以上に難航していた。

もともとこの世界で教養の高い人間は、貴族の子息子女か、商人の子供がほとんどだ。そして教

養があり人格的にも優秀な人材は、バーキラ王国としても貴重。ゆえに本来数が限られるはずなのだが、なかなか候補を絞り込むのが大変だった。

そう、候補を絞り込むのが大変なのだ。

聖域で文官を募集しているとの噂が何処からか広がると、我こそはと応募が殺到したのだ。

中には現役で王国の政務をこなしている者までいた事に、サイモンは頭を痛めていた。

「……うん？ 悪い話じゃないのか？」

そこでふと、妻のロザリーならサイモンが文官の候補者を探す間を十分に埋める事が出来るのではないかと思いつく。

王都の屋敷を維持するのは、家宰やメイド達がいれば大丈夫だろう。ロザリーが担当していた他貴族の婦人方とのお茶会やサロンでの情報収集や派閥の結束力を高める仕事も、今となってはさほど重要じゃないとサイモンは考える。

「うむ、イルマ殿には申し訳ないが、ロザリーの受け入れを頼んでおこう」

早速タクミ宛に手紙を書き始めた。

重要な事柄なので、通信の魔導具ではなく、ポートフォート家の紋章が刻印された上質の紙に自筆で書き、サインを記す。

「儂もそろそろ引退して、ロザリーのように聖域に移住するか……悪くないな」

近い未来、バーキラ王国の宰相が引退する事が決まった瞬間だった。

◆  
バーキラ王国の宰相、サイモンが妻のロザリーの行動に疲弊<sup>ひへい</sup>していた頃、遠く離れたユグル王国の王城でも、胃の痛みを感じてゲツソリしている男がいた。  
「ルーミア、姿が見えんと思っていたら……」

ユグル王国の国王フォルセルティは、娘からの手紙を読んで肩を落としていた。

聖域にいるはずのミーミルから、わざわざ鳥の従魔を使って届けられた手紙。早馬<sup>はやうま</sup>よりも格段に早く届くのだが、それだけ重要な案件だと、手紙を読む前から分かる。

そして案<sup>あん</sup>の定<sup>じよう</sup>、フォルセルティは脱力した。

「儂<sup>わが</sup>が聖域まで出向いて連れ帰ったばかりだというのに……」

王妃のルーミアが聖域に移住すると言っているが、ユグル王国としては大丈夫なのかと娘のミーミルが問い合わせてきたのだ。

フォルセルティは、そこでようやくこのところルーミアと顔を合わせていなかったと気付く。

ルーミアを連れ帰るために、フォルセルティが聖域へ出向いた事で仕事は溜まりに溜まっていた。お陰<sup>かげ</sup>で、執務室にこもりっぱなしだったので、ルーミアがいなくなっているのに気が付かなかった。

そこに従者が駆け込んできた。

「陛下<sup>へいか</sup>！ 王妃様の身の回りの荷物が消えています！」

「……うむ、ご苦勞、下がってよい」

「はっ！」

従者が下がるとフォルセルティは深いため息を吐く。

そしてこれまで一言も口を開かず影のように立っていた宰相バルザに言う。

「なあバルザ、ルーミアを説得して連れ帰ってくれないか？」

「勘弁<sup>かんべん</sup>してください。儂<sup>わが</sup>がルーミア様に叱<sup>しか</sup>られるではないですか。あの方がそう言い出したら諦<sup>あきら</sup>めるしかござらん」

「……であるな。アレは、もともと優れた精霊の性質を持つておる。自由気ままなのは変わらぬか」

年経<sup>としへ</sup>たエルフ二人の深いため息が広い部屋に響く。

フォルセルティとバルザが連名で署名した手紙を書き終えるのは、あつという間だった。

◇

王都のお店経由で、サイモン様から僕——タクミのところに連絡が来た。



超特急で手紙が届くなんて、嫌な予感しかないのは僕だけだろうか。

恐る恐る手紙を開くと、たった一言「よろしく頼む」と書かれ、サイモン様の署名が記されていた。

「頼むって……」

その後、ユグル王国からもまったく同じ内容の手紙が、ユグル王とバルザ宰相の連名の署名入りで届き、これってドッキリ？ と現実逃避する僕がいた。

## 4 結果オーライ

ロザリー夫人の聖域移住についてサイモン様から了解する手紙が届いた事で、家を一軒建てないといけないハメになった。

ルーミア様はとりあえずミーミル様の屋敷と一緒に暮らすので、問題はないようだ。

ロザリー夫人の要望で、中央区画の東側に一軒の屋敷を建てた。

一緒に連れてきた従者や侍女と暮らすそうなので、うちほどではないけど、そこそこ大きな屋敷だ。

ロザリー夫人は「大きさは関係ない」と言っていたが、子爵夫人だからね。あまり粗末な屋敷じゃダメだろう。

また、東側の端に建てたのは、反対側にあるユグル王国やロマリア王国に対する政治的な配慮だ。まあ、それを言ったらミーミル様の屋敷は、僕らの屋敷のお隣で中央区画のど真ん中の一等地だけどね。その辺りはミーミル様と大精霊達との関係や、最初期からの付き合いって事で大丈夫らしい。

東側で中央から少し外れているとはいえ、中央区画なのには変わりなく、新しく建てられ今もドワーフやエルフの職人達が彫刻や内装工事を行っている役所まで、徒歩でも十分に通える距離だ。そして早速、ロザリー夫人とルーミア様は、シャルロット達と一緒に仕事を始めていた。

シャルロット達は、聖域全体の政務にはつかず、あくまでもイルマ家が立ち上げた商会の事務作業がメインの仕事となる。

ロザリー夫人とルーミア様が国を離れ、聖域の政務を手伝ってくれるのは、僕的にはラッキーだったのかもしれない。

お二人はとても自由気ままだけど、それに目を瞑ればとても優秀だったんだ。

「戸籍の作成を急ぎましょう」

「基本的に聖域の土地は全部タクミ君のもの。大精霊様方のお力添えはありますが、住居や田畑や果樹園はタクミ君達が与えたものです。これで年間に僅かな税を徴収するだけなんて、外の人達

にバレたら大変ね」

「ルーミア様には、聖域内の事を中心にお願いしてもいいですか？」

「分かりました。ロザリー様は、圧倒的な黒字貿易にある三ヶ国との関係改善に取り組むのですね」

「はい。貿易の不均衡ふきんこうは夫も悩んでいましたから。まあ、三ヶ国に聖域に売れるような魅力的な物が無いのが悪いのですけどね」

ロザリー夫人とルーミア様が文官娘や自分達が連れてきた侍女を集めて、出来たばかりの役所の会議室で、今後の大まかな方針を話し合っていた。

「すみません。貿易の不均衡に関しては僕も気にはなっていて、現状無理して三ヶ国から色々買ってますが、焼け石に水で」

「聖域でしか買えない物が多すぎるのは仕方ないわ。三ヶ国からは綿わたや木材をもっと買いましょう」

「他に何かないかしら」

思案するロザリー夫人とルーミア様に僕は言う。

「小麦や大麦はどうですか。最近、エールやウイスキーの生産量を増やしたんですが、まだまだお酒の需要は伸びるだろうと思ってます」

主食のパンに使う小麦は聖域産の物を使いたい。不思議なくらい味が違うからね。

その点、エールやウイスキーなんかのお酒の原料になら、三ヶ国から輸入した物を使っても大丈夫なんじゃないかな。

ドガンボさんやゴランさん達ドワーフに言うと思われそうだけどね。

「タクミ君、お酒の原料にこそ聖域産の物を使わないとダメよ。良いお酒が造れないわ」

「ルーミア様、そこは輸出用の二級酒と割り切ればいいのでは？」

「それはアリですね、ロザリー様」

お酒の味があまり分からない僕には理解出来ないけど、ウイスキーやエールも原料の質は大事らしい。

「一度聖域産のお酒を飲んだら、今まで飲んでいたお酒が泥水どろみずのように感じたものです」

「そうですね。ユグル王国は高級ワインが有名でしたが、ここでワインを飲んだら……」

「そんなものなんです」

ロザリー夫人が言うには、聖域の中で造られると、輸入した原料で造ったお酒でも、美味おいしいらしい。

「えっと、どうしてそれをロザリー夫人が知ってるのですか？」

「フツッ、ドガンボ殿が試しに造ったものを試飲させていただきました」

「いつの間に……」

「タクミさんはお酒にあまり熱心じゃなくて、ドガンボ殿やゴラン殿に任せっきりと聞いています

わよ」

「そう言えばそうだった」

聖域では安全で美味しい水がいくらでも飲めるので、お水の代わりにワインを飲む必要はない。だから完全に嗜好品しこうひんの扱いなんだけど、ドワーフだけじゃなくて、エルフや獣人族もお酒を飲むのが好きみたい。

その二種族には貧しくてお酒なんて飲めない暮らしをしてきた人が多いらしいので、その反動なのかと思う。

「聖域産の原料で造られた二級酒。輸入した原料で造られた二級酒。聖域産の原料で造られた中でも、特に出来の良いお酒を特級酒とランク分けして、販売数を調節しましょうか」

「それは良いアイデアですね。二級酒をメインの輸出としましょう」

お酒の話になるとロザリー夫人もルーミア様も熱心だな。

「では、酒造所のドワーフとエルフには、私から話を通しておきますわ」

「お願いします、ロザリー様」

その後、サイモン様が募集している文官の応募経過を聞いたり、何人の文官が必要かを話し合い、今後は週に一度、会議を開催する事を決めたりした。

基本、僕も参加するけど、僕が参加出来ない場合、ロザリー夫人とルーミア様、シャルロットの三人が主体となって会議を進める事が決まった。

## 5 整いつつある聖域

戸籍作りはロザリー夫人とルーミア様が主導して、進められている。

何よりありがたかったのは、僕の仕事量が減って、武具の開発を再開出来た事だ。

途中で手を止められていたからね。

「学校があつて、教会があつて、立派な役所が建てられて、もう聖域は立派な国ね」

「ええ、あとは税制を整えればね」

僕はロザリー夫人、ルーミア様、エリザベス様、ミーミル様と役所までの道を、会話しながら歩いている。

かたや宰相夫人、かたや王妃が徒歩で街中を歩く機会など、聖域じゃなければありえなかっただろう。僅かな距離でも馬車を利用するのが貴族だ。

まあ、それは防犯上の理由なのだろうが。

流石に彼女達が一人で歩く事はないが、従者を一人連れて散歩なんて、よく見かける光景だ。

これは聖域の中が安全だというのが一番の理由だけど、もう一つ、聖域の素晴らしい景色の中を歩く事が楽しいというのも大きな理由の一つになっている。

「道幅が広く綺麗きれいなのが素晴らしいわね」

「そうですね。バーキラ王国の王都でもここまで広く綺麗じゃないものね。ねえ、エリザベス様」

「ええ、ロザリー様」

聖域の中央区画の道は、道幅を広くとり石畳いしだみにしてある。馬車の交通量はバーキラ王国の王都やユグル王国の街と比べて極端に少ないから、必要ないんだけどね。

「公園というのですか？ この広場も良いですね」

「ユグル王国には、このようにわざわざ緑を整えたスペースを造る発想はなかったわ」

「住民の憩いどの場になって良いですね」

聖域の公園の横を歩くルーミア様達が、それぞれ感想を言い合っている。

聖域の公園には、この世界ではここにしかないだろう、遊具も設置されている。まあ、この世界には公園がないからここにしかないのは当然なんだけど。

そして公園といえば桜の木という事で、春にはお花見が出来るように何本か、品種を変えて植えてある。あとは花壇かだんに色とりどりの花が四季ごとに咲いて、聖域の住民の癒しいやすの場になっている。

「綺麗なお花が咲いています、管理はどうされているのですか、タクミ君？」

御婦人方の後ろから付いて歩いている僕に、ルーミア様が質問してきた。

「中央区画の植物に関しては、ドリュアスが担当しています」

「まあ、ドリュアス様が」

「直接ドリュアスが花や木々の管理をする場合もありますし、眷属けんぞくの精霊や住民が手伝う場合もありますよ」

「そうなのね。でも良いわね、こういうの。貴族の屋敷にある庭園は見栄みえみたいなものだけど、誰でも楽しめるなんて素敵すてきだわ」

ルーミア様の感想にロザリー夫人とエリザベス様も頷いている。

貴族の屋敷では凝った庭園を造っている事が多い。

バラ園だったり、迷路のように刈り込んだ生垣いけがきだったり。

でもみんなが楽しめるようにはなっていない。貴族の屋敷に誰でも入れるわけないから当たり前だけどね。

「中央区画はまだ空きスペースが多いですから、そこがお花畑みたいになっている場合も多いですね」

僕がそう言うと、ロザリー夫人が聞いてくる。

「でも居住区にも公園はあるのでしょうか？」

「はい。そっちは子供が多いので遊具の数が多いです」

「いい試みね。うちの人にも……ってダメね。王都には空きスペースがないわ」

「うちの王都なら……フォルセルティに言ってみようかしら」

ユグル王国の王都は土地に余裕があるので、ルーミア様は前向きだ。

役所に到着した時、ドワーフのドガンボさんが声をかけてきた。

「おう！ タクミ！」

「おはようございます、ドガンボさん」

「外回りの彫刻は一応完成したぞ。あとは内装にも彫りたい場所が何ヶ所があるが、そう時間はかからんじやろう」

「ありがとうございます。調度品の方はどうですか？」

「おう、そっちはエルフの職人が中心になって頑張っておるし、もう直ぐ終わりそうじゃ」

「じゃあ引き続きお願いします」

「おう！ 任せとけ！」

ドガンボさんは酒造に鍛冶、大工や石細工と、やりたい仕事を楽しんでいる。メインは酒造らしいけどね。

ドガンボさんと別れ、役所の中にある会議室に入ると、早速今日のミーティングを始める。

「本格的に動き出すのは、うちの夫が文官の人選を終えて戦力が整ってからですね」

「そうなりますね。ですからそれまでは、僕達で出来る事をコツコツとするしかないですね」

ロザリー夫人と僕が話していると、ルーミア様が手を挙げる。

「ちよつとよろしいかしら」

「ルーミア様、どうしました？」

「聖域の施設で治療院を見かけなかったの。まだないのかしら」

「治療院ですか……真っ先に造るべきでしたね」

ルーミア様から治療院、いわゆる病院がないと指摘された。

今まで僕、アカネ、ミーミル様、教会の神官が聖域の住民の病氣や怪我を治していたんだけど、ちゃんとした病院は必要だろうな。

僕はふと思いついて提案する。

「この際、住民に欲しい施設のアンケートでも取ってみます？」

「うーん、どうなのかしら。治療院以外は娯楽を含めて充実していると思うわよ」

「その辺りは文官が揃ってから考えてもいいんじゃない？」

住民へのアンケートは、そう急ぐ必要はないとエリザベス様やロザリー夫人は言う。

その後もロザリー夫人やルーミア様が中心になって、片付けるべき仕事の優先順位を決めていった。

頼りになるなあ。

◇

会議の後、僕はロザリー夫人やルーミア様達から出た治療院の話を、ソフィア達に相談した。

「今までは教会かミーミル様、あとは僕かアカネが病氣や怪我をした住民に対処していたけど、治療院を造った方がいいかな？」

「それはちゃんとした場所があった方がいいに決まってるじゃない」

「やっぱりか」

何を当たり前の事を言ってるのとアカネに言われ、改めてもつと早くに造るべきだったと反省する。

ただ言い訳するわけじゃないけど、聖域の空気が良いのか、水や食べ物に関係しているのか、聖域の住民達はあまり病氣に罹<sup>か</sup>らない。

勿論、怪我はするだろうけど、聖域には希少で貴重な薬草が豊富にあるので、ちょっとした怪我なら住民が自分達でなんとでも出来る。

だから僕やアカネ、ミーミル様の魔法が必要な場面は少なかったんだ。

「ちゃんとした治療院の建物を建てて、そこに交代で神官さんにいてもらおうか」

「薬師<sup>いし</sup>もいれば良いのしょうけどね。ああ、私は治療院の仕事をメインにしてもいいわよ」

「アカネが引き受けてくれるのならありがたいよ」

ミーミル様は教会の仕事も手伝っているので、アカネが治療院をメインで運営してくれると言うなら願ってもない。

「薬師ならルーミア様とミーミル様にお願ひしてみますか？」

ソフィアが言った。彼女の話では、ユグル王国には薬草の扱いに長<sup>た</sup>けた薬師が多いらしい。流石森と共に生きるエルフだ。

様々な病氣に合わせた薬を長い歴史の中で数多く生み出し、研究を重ねてきたらしい。

「魔法に頼らない治療も確立しないといけないから、是非ともお願いしたいけどやってくれるかな……」

「大丈夫じゃないですか。何ならセレネー様にお願ひすれば、断るエルフはいないと思います」

「へえ、そうなんだ」

光属性魔法に適性のあるエルフは、そのほとんどが神官として働いているらしい。彼らはノルン様は勿論、光の大精霊セレネーも信仰しているそうで、セレネーから話せば確実だと言う。

「いや、でもそれは流石に悪いよ。エルフでも光属性魔法に適性のある人は少ないんだろう？　なら、断れない状況で誘うのは違うと思うんだよね」

「確かにそれもそうですね。でもユグル王国の薬師の中には、是非とも聖域に移住したいって人の方が多いと思いますよ」

「そうなの？　いや、それもそうか。薬草の宝庫だもんな」

「そういう事です」

考えてみれば、薬師にとって聖域は夢の場所だった。

流石に秘薬エリクサーの素材はないけど、それ以外の希少な薬草は普通にあるからね。木の大精霊ドリユアス様々だ。

「でも治療院を作るなら、薬草専用の畑を作った方がいいかもね」

「それならお姉ちゃんにお任せよー!」

「うわあ! びっくりした! 驚かすなよ、ドリユアス」

僕が薬草専用の畑の話をした途端、その場にドリユアスが現れた。

「まあまあタクミちゃん、怒らない怒らない」

「怒ったわけじゃないけどさ。いきなり出沒するのはやめてほしいよ」

大精霊全員に当てはまるんだけど、彼女達は神出鬼没だから困る。

「タクミちゃん、早速治療院と薬草畑を造りに行きましょう」

「ちよ、ちよっと、引つ張らないでも行くから!」

ドリユアスに手を引かれてしばらく歩くと、彼女はある場所で立ち止まった。

「タクミちゃん、ここいいんじゃない」

「教会の近くか。神官の人達と協力する事を考えれば悪くないね」

ドリユアスが指定した場所は、教会の直ぐ側だった。

中央区画には、僕の屋敷やミーミル様の屋敷、大精霊達用の屋敷、最近建てたロザリー夫人の屋

敷以外は公共の施設が主なので、土地は余っている。

地下室は一階分あれば大丈夫だろう。建物もそれほど大きなものでなくてもいいと思う。

診察室と待合室、薬草の調合をする部屋と倉庫に入院患者用の病室が何部屋かあればいいかな。

石材や木材、ガラス素材を必要数アイテムボックスから取り出し、頭の中で完成図を強くイメージする。

「錬成!」

僕がそう唱えると、錬金術が発動して魔力光が素材を覆う。

次の瞬間、地下一階、地上三階の石造りの治療院が完成した。

「うんうん、良い出来だと思っわー」

「まあ、器が出来ても薬師や医者がいないと意味ないけどね」

「それもタクミちゃんに任せれば大丈夫でしょう」

「はあ、分かってるよ。武具もまだ中途半端なのに……」

ドリユアスが満足そうに完成した治療院を見ている。聖域で暮らす人が増えて病院は必須だったから僕もホッとしたよ。

さて、備品を揃えて人を探さないとな。



## 6 光の剣

治療院を建てて、役所でロザリー夫人とルーミア様、そしてエリザベス様が文官として働き始めたお陰で、僕の事は随分と楽になった。

でも油断していると、いつまた山ほどの仕事が襲いかかってくるか分からない。

だから今のうちにかねてから考えていた剣を打とうと思う。

僕は既にソフィアの持つ聖剣アマテラスと対をなす絶剣ツクヨミを持っている。

だけど以前ダンジョンでアンデッドを相手にした時、雷属性も同時に付与してあるとはいえ闇属性のツクヨミは使い所が難しかった。

僕のメイン武器である槍、アイスブリンガーでは戦いづらい乱戦の場合など、剣を使いたい場面もあるだろう。そこで僕はもう一振りか二振り剣を打つ事を決めた。

ここで考えられるのは、単純にソフィアのアマテラスのように光属性の剣にするか、それとも属性は戦闘時にその都度付与するかだ。あらかじめ属性が付与された剣なら、魔力を流し込むだけでいい。シンブルで使いやすいし、僕が造ってきた武具は基本的にこのタイプだ。

その都度付与する方法なら、相手の弱点に合わせて武器を変える必要がない。

ただ、どちらにも欠点があつて、あらかじめ属性が付与された武具は、魔力を流し込む量により威力が増減するので、調子がいい時は大量の魔力で攻撃力を高められるものの、魔力がない時はかなり厳しい。

相手に合わせてその都度付与する方は、相手を選ばない万能性があるが、その分攻撃力は落ちる。攻撃力のある特化型をとるか、一振りであらゆる属性に対応出来る汎用性をとるか。

僕の場合に限っては、光属性を付与した特化型一択だ。

何故かと言うと、僕にはアイテムボックスがある。戦闘中に武器の交換も可能だし、これまでも相手に合わせてその都度武器を変えてきた。あとはベースの金属をどうするかが重要になってくる。アマテラスやツクヨミは、吸魔の剣にオリハルコンを合成して造った。今回もオリハルコンを使う事は決定として、どの金属と合わせるか考えないといけないな。

「ノームに相談してみるか」

オリハルコンも土の大精霊であるノームからもらわないと手持ちじゃ足りないからね。

そうと決まれば早速ノームに相談に行こう。

僕が向かったのは酒造所だ。

基本的にノームと火の大精霊サラマンダーはここにいる事が多い。

「あっ、やっぱりここにいたんだね、ノーム」

「うん、何じゃタクミか。何の用じゃ」

「実は……」

そこで僕はノームに新しい剣を打とうと思っている事を話し、オリハルコンを二振り分欲しい事と、合金にする場合にどの金属を使えばいいのか相談しに來た事を話した。

「ふむ、オリハルコンか、二振り分と言わずもつと持っていてもいいぞ。このドワーフ共は扱うのはアダマンタイトどまりじゃからな。量は心配ない」

「おつ、オリハルコンを合金にするのか」

「そうなんだよ、サラマンダー」

サラマンダーも興味があるのか近づいてきた。

すると、ノームがぼつりと言う。

「……オリハルコンをメインにヒヒイロカネを合成するか」

「ヒヒイロカネ？」

「うむ、ヒヒイロカネは韌性はあるが硬度はミスリルに少し負ける程度。じゃが、この金属は特別での、エンチャントをかけなくても自動修復するのじゃ」

「へえー、だけど硬度に問題があるのなら、剣に向かないんじゃないのか？」

刃の部分はどうしても硬度が必要になる。高い韌性と硬度を両立させるのが一番難しいのだ。

「それが問題ないんじゃ。実はこのヒヒイロカネという金属はのお、ある金属と合金にすると、そ

の金属の硬度と韌性を何ランクも引き上げる、ある意味神の金属なのじゃ」

「ひよつとしなくても、それがオリハルコンなんだね」

ノームが頷く。オリハルコンを合金にする話をしているんだから当たり前だよな。

「よし、タクミの工房に行こうかの」

「えっ？ ノームが工房に来るの？」

「うむ、このヒヒイロカネは神の金属と言われるだけあって少々特殊で、う、錬金術と鍛冶魔法だけでは上手くいかんのじゃ」

「へえ、そうなんだ」

僕が感心していると、サラマンダーが口を開く。

「よし！ 俺も行くぞ！」

「サラマンダーまで？」

「タクミ、農達もいいか？」

そこにグランさんとドガンボさんが一緒に工房へ行くと言い出した。

「我らドワーフの職人でもオリハルコンやヒヒイロカネを扱った者などおらん。雑用でも何でもするから見学させてくれ」

「ふむ、お前達もついでじゃ、ついてくるがいい」

僕がオーケーを出す前にノームが了承した。多分、何か理由があるんだろう。

そうして僕達五人は、鍛冶工房へ向かった。

鍛冶工房に着くと、ノームがオリハルコンのインゴットとヒイロカネの塊を出してくれた。

「あれ？ ヒイロカネはインゴットじゃないんだ」

「そう、そこが問題なのじゃ」

ノーム曰く、ミスリルやアダマンタイトをはじめとする魔法金属全般は精錬や鍛錬の段階で魔力を必要とする。

ドガンボさんやゴランさんは、鎚に魔力を込めながら叩いて鍛錬するのだが、その時に必要な魔力がバカにならない。

僕は鍛冶魔法と錬金術で成形、精錬、鍛錬をしているのだけど、それは僕の魔力量が人外レベルなのと、鍛冶スキルや錬金術スキルが高いからだ。

「ヒイロカネは、錬金術での精錬を受け付けられないのじゃ」

ノームがそう言うと、ゴランさんとドガンボさんが頷いて言う。

「しかも鎚に込める魔力もハンパじゃねえんだ」

「ゴランの兄貴の言う通りじゃ。儂とゴランの兄貴が来たのもタクミを手伝うためじゃ」

「しかも温度の管理もシビアだからな。だから俺がいるんだぜ」

最後にサラマンダーが言った。

「なるほど、そうだったんですね」

「うむ、ヒイロカネは言うてみれば生きた金属じゃ。ワガママじゃから、鎚越しの魔力しか受け付けぬのじゃ」

ノームの話によれば、ヒイロカネだけは何故か、金属の組織や分子をイメージしても錬金術では精錬出来ないらしい。これはもうそんなものだと思っただ方がいいそうだ。

ノームは続ける。

「ところが一度インゴットに精錬してしまえば、あとは錬金術でも鎚でも打てる素直な金属に変わるんじゃ」

「悪いね、そのために皆んなに手伝ってもらって」

「何、神鋼の再現に立ち会えるんじゃ。ドワーフとしてこんなに名誉な事はない」

「そうじゃ。儂らドワーフだけでは不可能な技に携われるなんて、タクミと知り合えて良かった」

ゴランさんとドガンボさんは早くも感動しているみたいだ。

神鋼というのは、神が創造したとされる神創武器に使用されているヒイロカネとオリハルコンを合わせた金属で、ノムストル王国にナイフが一振りだけ国宝として遺されているらしい。

「では早速始めるかの」

ノームが取り出した金属の塊は、銅のように金色に鈍く輝いていた。

「これがヒイロカネ……十分綺麗に見えるけどね。これでも精錬されていないんだ」

「ヒヒロカネの精錬は、他の金属の精錬とは少しだけ意味が違うからの。この塊には不純物はほとんど含まれておらん。これから行うのは、この塊に満遍なく魔力を浸透させる作業じゃ。ではサラマンダー、頼むぞ」

「おう、任せとけ！」

サラマンダーがヒヒロカネの塊を熱していく。

工房の魔力炉まりふろを使わずに、サラマンダーの焰ほのおのみで加熱されたヒヒロカネの塊が赤熱して輝く。このヒヒロカネを熱するのは、サラマンダーじゃないと難しい理由が分かった。それは炎を形成する濃密な魔力だ。鍛錬中だけでなく、加熱の際にも魔力に曝さらされる事で、ヒヒロカネは神の鋼の素材と成り得るんだ。

ドガンボさんが金床かなどしにヒヒロカネを置き、俺とゴランさんが鎚に魔力を込めながら叩く。

叩いた箇所が不思議な光を放ち、不純物が火花となって飛ぶ。

魔力が枯渇こかつしてくると、マナポーションを飲んで交代で休憩をとり、僕とドガンボさんとゴランさんの三人でヒヒロカネを叩く。

ヒヒロカネの塊が形を変え、叩いた箇所がまばゆく光るようになったところで、ノームからストップがかかる。

「うむ、もう十分じゃろう。ヒヒロカネの精錬と鍛錬は終了じゃ」

「ふう、つ、疲れたあ」

「……流石に年寄りには応えるのう」

「ゴランの兄貴、まだオリハルコンとの合成が終わっておらんぞ」

魔力も体力もギリギリまで使った僕達三人がへたり込んで休憩していると、ノームがオリハルコンのインゴットを取り出した。

「二振りの剣なら、これで十分な量じゃろう」

「ありがとう、ノーム」

「それで、どんな剣を打つつもりじゃ」

「ああ、それなんだけどね……」

僕がノームに構想を話し始めると、ドガンボさんとゴランさんも興味津々で聞き耳を立てる。

僕が考えている二振りの剣のうち、一振りは今まで使ってきた絶剣ツクヨミと同じ大きさで同じ形の片刃の片手剣にしようと思っている。

アンデッドや闇属性に近い魔物以外なら、それで戦える。

もう一振りは、利き手と反対側の手に持ち、時には盾たてとして、時には攻撃の手段として使える小太刀サイズの剣を考えているとノームに説明した。

「ふむ、大小の光の双剣か……良いの」

「ああ、面白そうじゃ」

「ふむ、新しい神器の誕生に立ち会えるぞ、ゴランの兄貴」

「ついだ、温度の管理は俺に任せろ」

「ありがとう。頼むよ」

ノーム、ゴランさん、ドガンボさん、サラムンダーに礼を言う。

オリハルコンとの合成と作刀は、日が暮れた後に行う事になった。

それまで一旦屋敷で休憩がてら食事しよう。

僕は皆んなを誘って屋敷へ移動した。

広いダイニングで家族と仲間と一緒に食事を楽しんで、僕はさっきのメンバーと工房に戻った。気持ちがいりラックスすると魔力の回復量も増える気がするね。

「さて、ツクヨミを見せてくれ、タクミ」

「はい、どうぞ」

ゴランさんがツクヨミを見たいと言うので、アイテムボックスから取り出し渡した。

「ふむ、見事な剣じゃな。二属性の付与とは大したものじゃ。じゃが拵えが無骨に過ぎるな」

「どれ、ゴランの兄貴、僕にも見せてくれ」

ドガンボさんがゴランさんからツクヨミを受け取り隅々まで検分する。

「これは以前タクミが手に入れた吸魔の剣を打ち直したモノじゃな。見事なものじゃ」

「これから打つ剣は、付与せずとも自動修復の特性を持つ剣になる。その分、違うエンチャントを

かける事が出来るんじゃ。完成が楽しみじゃ」

ゴランさんとドガンボさんはひと通り検分したあと鞆に収めて返してくれた。

「では始めます」

僕はいつものように、硬度を変えた合金を作る。

心鉄には韌性に富んだもの。

刃金にはヒビロカネの量を減らした硬いもの。

皮鉄はその中間のものを造る。

ノームにオリハルコンとヒビロカネの合金にする割合は教えてもらっている。

知らなくても一パーセント刻みで何度も合成を繰り返せばいい話なんだけど、時間と魔力の無駄だからね。

オリハルコンに五パーセントのヒビロカネを合成し、満遍なく混ざり合うよう強くイメージする。

青白いオリハルコン特有の色に黄金色のヒビロカネを少量合わせていく。

「錬成！」

そう唱えると、オリハルコンのインゴットとヒビロカネのインゴットが混ざり合い、エメラルドグリーンに染まった合金が出来上がった。

「ふう、魔力がめちゃくちゃ持っていけるね」